

(1)

万国のプロレタリアート団結せよ!

# プロレタリア通信 No. 8

共産主義者同盟中央書記局

1958. 3. 1  
定価 一部 10円

## 日本資本家階級の帝国主義的膨脹政策

### 安保改訂の陰謀を粉碎せよ!!

### 運動の階級的発展を阻む「中立」論を粉碎して前進せよ!!

#### 一、安保改訂の意味するもの

合理化の嵐の前で職場斗争を闘いつつ、大巾賃上げと最賃制を要求する労働者大衆の前に、警職法反対斗争にも比すべき一つの大きな政治的課題——安保改訂粉碎の行動が提起されつつある。そして、激しい階級斗争の渦中にある労働者大衆は、この資本家階級の陰謀に対して闘いはじめている。二月二十八日には、東京において労働者を中心とした安保改訂阻止の街頭デモンストレーションが行われた。又、過去数年間つづいた資本蓄積の比較的順調な進行が皆かつた平和的気分の存在も手伝って、資本家階級の露骨な侵略欲の増大は小ブルジョア大衆をも行動の刺激に駆り立てている。五一年、対日平和条約に反対し、全面講和を要求して立上った学者、インテリゲンチヤも活発な動きを始めている。

ここに大衆運動の端緒がみられる。すべて、これらの行動を改良主義的ではなく、革命的に定式化し、実行する事は、共産主義者にとつて欠かせない任務となつていく。だが、労働者階級の意識的な、真剣な抵抗を組織するためには、資本家階級の冷酷な打算が生み出したこの政策の本質を科学的に認識する事——その基礎にあるブルジョアの生活諸条件との関連において把握する事——が絶対に必要である。そして、それは一般的にそうであるばかりでない。警職法反対斗争の教訓を正しく学んだものは、このような科学的な認識を欠いた斗争指導の中にある諸々の傾向を分析し、誤つたブルジョア民族主義と日和見主義に対する闘いを非妥協的に行う事なしには、闘いの発展がありえない事をよく知っているのである。

#### ▽「貧弱な民族主義者」の議論△

この安保改訂が、日、米資本家階級のどのような意思と計算の中で具体化されようとしているのか? それに対して如何なる反撃をもつて応うべきか? 真剣な闘いを準備せんとしている大衆の間から、このような問が指導部に対して発せられている。

「アメリカ帝国主義者は、この「安保改訂」によつて、「平等化」の名のもとに日本を沖繩、小笠原にも拡大した区域の「共同防衛」に引きずりこむことによつて、日本の独立と安全をふみにじろうとしているのだ。岸内閣は、すずんでアメリカの要求に屈服して、国民の利益を裏切り、アジアで日本民族をして戦争と破壊の道にすすませようとしている。したがつて、日本民族にとつて屈辱的な安保条約を破棄して、日本を自主的な外交政策をとるアジアの中立国家にするために争わなくてはならない。」

このような解答が、長い期間にわたつた従属民族解放のドグマにとらわれつつけながら、今日においても尚、共産主義運動の指導部としては念には考えられている。共産党からも、「総資本」に対する「総労働」の抵抗を文字の上では理念とする総評だが、一体安保改訂は、日本資本主義の客観的運動法則が必然にする政策ではなく「裏切り」という概念が示すように、「政治家岸の個人的恣意によつて、思うままにされるものなのだろうか? 資本制生産の対立的性格に基く二大階級の分裂は、どのようにして「国民」という一つの範疇へ融合せられてしまったのであろうか? 「自分の国がはずかしめられている。私にはこれ以上大変な事はない」という思いで頭腦がいつぱいになつて「貧弱で頑固な民族主義者」(レーニン)にとつては、たしかにそれはますます「国の従属を深め」「日本民族を破滅させ」「国の利益を裏切る」ものなのかも知れない。

しかし、階級斗争の利益の前には、あらゆる権威とドグマが拒否されねばならない。そうすれば、この取引の裏には、両帝国主義者間の冷い計算と金銭勘定がひそんでおり、世界市場においてますます搾取を強化、拡大し、独占的地位を回復しようとする日本資本家階級の野心があり、したがつてそれは労働者階級の實力行動によつてのみ、階級斗争によつてのみ粉碎せられ得るものである事は容易に推察されるであらう。

### ▽改訂内容の意味するもの△

安保改訂のための日米交渉は、繁栄過程での急速な経本蓄積によって世界市場の競争場裡に強化して登場してきた日本資本家階級がアメリカ帝国主義に對してその相対的地位の回復を要求するという形をもつて最初始められたのである。もちろん、彼等は中國革命と植民地革命に對抗し、特に日本の労働者階級に根本的に對抗して行く為には、アメリカとの間に不可避的な利害を調整しながら、國際的階級斗争における同盟者としての結束を堅めねばならない。それは「國」の「從属」でも、資本家階級の「裏切り」でもなく、生きた階級斗争の現実の要請なのである。しかし、資本家階級のこのような実践的友愛にもかかわらず、日本の資本家階級がその発展のためには、帝國主義戦争の敗北によって余儀なくされた「屈從」をはらいのけねばならぬという矛盾をその内にはらんだ現実的關係を生みだしたのである。

五七年三月、岸は「神武景氣」による繁栄過程での支配の安定を背景に、改訂の第一次案をアメリカの帝國主義者の前に提起したのである。その内容は、後に分析する通り、彼等の「日米新時代」という民族意識の煽動にふさわしい、日本の帝國主義的自立をはつきりと指向したものであった。しかしアメリカ帝國主義者は、強力な労働者の抵抗の存在と、繁栄過程での資本蓄積の要求とあきらかに衝突する経済軍事化の促進の停滞が余儀なくした軍事的力量の不足を理由に、「別個の双務的な日米防衛条約」を結びうるだけの同盟者としての資格を彼に与えなかつたのである。岸は「保守党」としては、どんな抵抗を排除しても、憲法改正を中心とする自助自衛能力を備えた独立の体制を、この数年間の内に築かねばならぬ(一九五七・七・三「読売」)と、帝國主義者としての不戴天の決意をあらためて堅めざるを得なかつた。

★(1)國連憲章との関連の明記(2)米軍の配備(3)米軍の配備にかんする事前協議  
 そうして一年の経過を経た五八年七月の岸・マック会談において、日米帝國主義者の間にあらたらしい取引のやりとりが始まる事になった。アメリカ帝國主義者の計算は、この取引の中で或程度日本政府の要求をのみながら、極東における國際防衛主義者の強化のために、強化せる日本帝國主義者の力を動員すると共に、現実に対応した自己の覇権の形式をととのえる事にあつた。彼等は、日本の資本家階級に共同防衛の義務を果し、その適用地域の沖繩、小笠原への拡大を要求した。一方この要求をうけられる事は、アメリカとの間に全面的な帝國主義的對立に至つていず、しかも國際階級斗争の利益の前に結束した同盟關係を要請されている日本の資本家階級にとつても必ずしも不利益でない。ただ単にこのような消極的の意味においてでなく、市場的な資本を輸出し搾取する権利を世界的に拡大する事、巨大な資金を國際的な資本市場から獲得する事等々の要求をもつ、今日の帝國主義者にとつてふさわしい政治的な威信を備えるために、又狭隘な國際的障壁をこえて膨脹した生産諸力が帝國主義諸國のそれ、ないしは植民革命と衝突した時の強力な準備をするために、積極的な利益をもつていのである。なによりも労働者を始めとする人民階級がそれにならざる可成り示すかという計算、それに加えて膨大な國家資金を投入しなればならぬ軍事事業が再生産過程の維持にとつて不可欠の要請事になつてきているかどうか、中國革命や、植民地革命が「自國」の労働者の行動と合流して、自國の支配の維持を直接脅かす迄に至つてい

労働者階級のエネルギーを解放することを求めて、改訂交渉を公然と行う事を抑制し、また、当初の岸構想を若干変更する事をも、決意したのである。すなわち第一グループの後退。

しかし、資本家階級及び自民党の意図は消えさつたのではない。一方では自民党内の意見を調整することに全力をあげながら、偽購の真意を宣伝しつつ、民族意識をあげ、失つた小ブルジョア階級の信頼の獲得に必死になりながら、他方では、外務官僚によつて秘密裡の交渉を続けていたのである。そして、二月十七日、改訂の最も熱心な推進者——藤山外相は、「条約の適用区域」に沖繩、小笠原を含めない「安保改訂藤山草案」を発表し、翌十八日ひらかれた岸、藤山、赤城、福田四者会談は、この藤山提案を検討した結果基本的にこれを了承し、「四月調印」の方針を堅持し、これに向けて党内意見の調整を行うことになった。まず、労働者の抵抗がすくなく、小ブルの信頼をつなぎとめておくのに恰好であり、しかも國際場裡で面子をたてるのに必要な第二のグループの改訂を行おうというわけである。

### ▽交渉をおくらせているものは何か△

しかし、それは彼等の思惑と計算通りには運ばない。この改訂案は当然アメリカ帝國主義者の反響をひきおこし、又、労働者階級の抵抗の増大と、その評価の相違にもとずく、自民党内の内部斗争を激化させたのである。

アメリカ帝國主義者は、沖繩への共同防衛義務の拡大という代償を伴わない日本帝國主義者の一方面的利益の拡大に反対である。これが四月調印の計算を狂わす一つの内部矛盾である。

又他方、資本家階級の侵略性の公然たる暴露により、階級斗争の幾多の試練を経た労働者階級の抵抗を突破する事なしには、安保改訂の陰謀がますます不可能になりつつある事を示している。ここから「双務化」には賛成だが内外情勢からみて改訂強行は慎重にせよ」という資本家階級の政治委員会に対する要求が生れる。又、その政治委員会の内部的に、第一グループをも含めた中央突破を露骨な河野派、金融資本の寄性的性格を代弁しながら、労働者をやたら刺激せよ、もつともうまくやる事を要求する池田派、第一グループを除いた「自立」、当面資本の利益と、階級斗争の利益にもなる事を主張する三木・松村派等々。だが彼等にあつて意見の調整点は「内外情勢の評価」すなわち「労働者をはじめとする人民階級がいかなる反応を示すか……」「政治的決戦ともいうべきこの交渉の時期が、果して適当であるか否か」「満身創傷となつた現在の岸政府が果して人民の闘いにたえうるかいなか」という事であり、もしも、人民を偽購させる事に成功し、労働者階級の闘いが強力にならぬやうな情勢をみたならば、急速に一致する事は火を見るよりあきらかである。

したがつて安保条約改訂に対する人民の闘いの大衆的展開は、緊急の必要事になつていく。自民党内の「中立政策に打開の道を見出そうとする現実的翼」なるものに期待をかけた「自民党内の有識の人士」の行動を支持したりする事は、問題の解決にならない。資本家階級のこの後退の中に、労働者階級の實力行動のくさびをうちこみ、帝國主義としての成長に不可欠の要石となつていく安保改訂の陰謀を阻止し、彼

るかどうか、世界市場における國際帝國主義者間の斗争がどの程度の深刻さに至つていのか、これらの「内外情勢の評価」が彼等にとつて政治的決戦ともいへばこの課題の解決をいつにするかのメドを与えているのである。

★勿論、将来の可能性として、強大な労働者階級の組織的抵抗の存在にもかかわらず、帝國主義的階級の絶対的強化の要求が基本になされる時、彼等ははその要求の下に労働者を暴力的に屈服せしめる積極的な道——労働者階級の組織を野蠻に破壊しつくすファシズムの形態——を追求するだろう。

一方岸のアメリカ訪問以来、日本の資本家階級によつて執拗に追求されてきたいわゆる「自主性回復」の条項が、この改訂の第二の内容ともいへば形成している。★彼等は、安保条約を國連憲章に基礎を置いたものと称して、ブルジョア的コスモポリタニズム、平和主義の幻想によつて、この侵略的軍事同盟の「ブルジョアの被」の仕上げを試みながら、一方では民族意識を煽りたつて、アメリカ帝國主義者に対する地位の回復を要求している。なかでも在日米軍の配備、使用に對する事前協議、同意を要求する事によつて日本資本家階級は、アメリカ帝國主義者の専横な振舞いに一定の制限を設け、自己の発言力の強化を目論んでいるのである。勿論、この要求は、アメリカ帝國主義者の利益と衝突し、彼等の反対を招いている。しかし日本資本家階級が、このような自立化の要求をかかげている時に、労働者の戦列の内部から行われている「不平等は藤山外相も認めている」「日米の名譽ある平等」等という煽動が、何のたしにならぬばかりか、きわめて有害な影響を与えている事はいう迄もない。

### ▽警備法以後△

このような相互斗争、葛藤の中で、昨年十月四日、藤山・マックの間に安保改訂のための最初の交渉が始つたのである。

資本家階級が、戦場的な教育労働者の勤闘斗争を全体の労働戦線から分断し、孤立化させる事に成功し、小ブル層をも広汎に獲得し、いよいよ自信満々と攻撃の手を打とうとしていた時である。「今や日本は自由世界を守るための戦いで、全面的役割を演ずる用意をしなければならぬ」と、岸は外国人記者にその侵略的野心をかくす事なくあきらかにしていった。この当時において資本家階級は、政治的決戦ともいへば安保改訂を、第一のグループをも含めて、全体の労働戦線の分散化の過程で強行突破しようとしていたのである。しかし、彼等の自信はあまりにも強すぎた。もう一つの資本家階級の攻撃的政治姿勢——警備法改正——に對する労働者階級の防衛的闘いの爆発は、逆に資本家階級をゆるがす政治斗争に發展し、安保改訂交渉も三回にして陸路によつて辛うじて、安定させた資本家階級は、安保改訂のたくらみが、ふたたび

等を窮地に追いこみ、そのような侵略同盟を必然にする腐敗せる資本主義社会からの活路を見出す事こそが、われわれの原則的立場であらねばならないのだ。

### 二、帝國主義に「中立」は可能か

安保改訂の陰謀が、復活、強化せる日本帝國主義者への膨脹の要求と、「世界市場の独裁君主」たるアメリカ帝國主義者の反革命体制強化の策謀との合作によつて企及されているとしても、それは今日の資本主義の客観的過程を政策的に反映したものに他ならないのである。だとすれば、それに対する抵抗は、ただそのような経済的發展の客観としてみられるにすぎない労働者階級が自己を積極的に表現する事——資本家階級に對する労働者階級の徹底的な實力行動を組織する事によつてのみ可能なのである。もちろん、安保条約改訂には、帝國主義者の侵略欲があまりにも露骨にあらわれているから、多くの平和主義者、小ブルジョアも闘いの過程にひきよせられるだろう。共産主義者の任務は、彼等の小ブル性、平和性のゆえにその闘いを拒否するのではなく、彼等を積極的な闘いに引き入れ、その闘いを燃えあがらせる事にある。だが、共産主義者がそれによつて闘いの階級的意義を見失つてしまふ、帝國主義者の政策をその実在的な基礎から切り離して、「戦争か、平和か」という現象面においてしかとらえる事が出来ないといふれば、それは運動に混乱と誤謬をもちこむ事にならぬのである。

### ▽ふたたび「民族主義者」の議論△

安保改訂が「日本」を戦争にひきいれ、破壊させようとするアメリカ帝國主義者の試みであり、又岸の「裏切り」がそれを許しているのだというように、帝國主義者の政策を政策そのものとして、その直接的な表現においてしかとらえる事が出来ず、したがつて階級と階級が消えてなくなり、「國の利益」しか残らない「頑固な民族主義者」は、次のような期待をもつて、「國民」に呼びかける。

「対米従属から自主的な中立政策に転換する事——つまり、いかなる軍事プロットクにも加わらず、自立国として真に平等な關係をすべての國ととりむすぶ事こそが、日本人民の願望と國の利益に合致するものである。」

しかし、安保改訂は、帝國主義者の必然の政策なのではないか。彼等に中立を要求するのは不可能なのではないか。

だが——、彼等は「貧弱な」頭脳をしばりながら答える——國民大衆の力は大きくなつた。國際的な条件も有利だ。それに伴つて、資本家の間にも、中立政策に打開の方向を見出そうとする現実的な方向が成長しつつある。われわれはたんなる暴論なスローガンとしてとどまらず、實現可能な政策として、われわれは斗争して

いるのである。

彼等は、そうしてアメリカから手を切れ！ 中立の立場に立て！ と資本家の政府に向つてさげすびたのである。もちろん、われわれもアメリカ帝國主義者の日本支配の事実を否定するものでない。われわれは、「中立」が可能だとしても、せいぜいそれは帝國主義的に自立した日本にすぎないであらうといつてはいるのである。しかし

し、そのような可能性もありそうもない。日本の資本家階級は、アメリカ帝国主義者との同盟を、当面は打ちきりたがらないであらう。アメリカ帝国主義からの支配を脱却するために、社会主義革命の立場にたたねばならない。こうわれわれは主張する。

しかし、日本は、潜在的帝国主義にすぎない。——と彼等はいう——それを民主中立日本に転換する事が可能なのだ。

それは、一体潜在的帝国主義とは何なのか？ それは、いかなる運動法則をもつのか？ それは、「民主主義」という「最上の外被」に覆われた平等な商品交換の関係をそのまま社会的再生産過程の原理とする産業資本主義を復活させる胚種を、そのうちに宿しているともいうのか？ その胚種を労働者階級がとり払ってやる必要があるともいうのか？ それとも、それは単なる政治的、軍事的概念を示すのか？

しかし、帝国主義論を上部構造論に解消するのは、マルクス主義に対する背理ではないか？ プルジョアの生活過程に表面的にあらわれるものを顕現するがままに記述し、図式的概念規定のもとにもち来すにすぎない非科学的な観察者に、これらの問の解答を期待する事は出来ない。

### ▽帝國主義

しかし、帝國主義は、単なる資本家や政治家の恣意的な政策ではない。それは、資本主義の最も高度に発達した世界史的発展段階をあらわす概念に他ならない。我々は帝國主義の政策をその経済から切り離すのではなく、その独自の、侵略的行動方法になつた理想ではなく、その根源の根絶のために斗争のなかでなければならぬ。

一九世紀後半における重工業の発展は固定資本の巨大化、経営に要する資本の異常な増加をもたらしたが、資本主義は株式会社制度の発展によつて、社会的に蓄積された資金から、事業に必要な任意の額の資本を調達するという機構を一般的に確立したのである。そして、その発展は、銀行の支配、合同による独占的利益の確保、積の模式を展開する事になる。それは、労働力の不測の過剰を実現しつつ、貨幣市場的に形成せられる独占的資本は、生産を制限し、価格を決定し、世界市場に進出し、資本を輸出し、競争のいつさいの可能性を敵の手からうばうためにますます死物狂い争がひきおこされる。この帝國主義体系内に秘められた矛盾は二度にわたる帝國主義戦争とロシア、中国におけるプロレタリア革命によつて爆発し、それは内部分解を始めたのである。しかし、それは、帝國主義の性格を根本的に変えたであらうか？ その巨大化の要請は、単に株式制度を通じてのみでなく、莫大な租税負担、公債発行による国家財政を通じての一層巨大な資金の調達機構を作りあげたのである。それは、直接的生産過程における搾取による個々の資本の蓄積によつて集積の増加をはかる産業資本主義時代とは異つて、その蓄積の模式をも國家的諸操作により規制

されるものとし、資本の輸出をも国家権力との一層の癒合のもとに新たな動力をもつて展開する。もちろん、彼等は、それが新たな破局の結果を招くのを恐れ、なによりも国際労働者階級の斗争に根本的に対立する為、絶えず相互に斗争しながら、国際的な結束をはかろうとする。世界的な資本市場の形成——IMF、世銀等——、独占的市場の国際的領域への拡大——ヨーロッパ共同市場等——、帝國主義的軍事同盟の結成等。もちろん、これは資本主義が「国際的に結合された金融資本による世界の共同搾取の段階」(カウツキー)に至つたのでも、全世界の帝國主義の合同の段階に至つたのでもない。帝國主義が、世界的に発展した生産諸力と、生産関係との極度に発展した矛盾を、資本家社会的組織化によつてますます矛盾を激化せざるをえないといふ解決のない展開によつて解決しようとするのである。

しかし、資本主義的生産の発展のどのような結果こそは、資本が世界的に結合せられた。生産者の所有として転化される十分な条件をもっている事を示すものでこそあれ、その経済的基礎に手を触れず、その政策と闘いうる事を示すものではないか。資本主義の最後期の段階に迄到達した日本の金融資本に向つて、自由、平等のイデオロギーの外被によつて被われた産業資本主義の時代おくれの政策を対置する事は、歴史の歯車をさかさまにまわそうとする夢想家や、資本主義が生成、発展、消滅の世界史的段階をたどる特殊な歴史的社会である事をみず、それを永久化する、プルジョアイデオロギーのみ許される事であらう。

### ▽資本家の中立ではなく資本家の打倒

ここで四十年前、同じように小ブル的な平和主義者と斗わねばならなかつた革命家レーニンの言葉を引用させていただきたい。

非帝國主義的資本主義(「民主中立日本」)とか、資本主義のもとでの同権の諸民族の連合(「真に平等な名譽ある日米関係の樹立」)とかいふ反動的なユートピアに、「講和綱領」を求め、前進して、プロレタリアートの社会主義革命に求めなければならない。根本的な民主主義的要求は先進的な帝國主義國で、いくぶんでも広汎に、又強力に実現出来るものでない。そして、同時に社会主義をとくす、この革命のための斗争を否定しながら、諸国民に「民主主義講和」を約束するものはプロレタリアートを欺瞞させるものである。

我々にとつても、アメリカ帝國主義の支配からの脱却は、求めてかちとられねばならない。又、日本の資本家階級の経済政策に対する、プロレタリアートが対置出来るものは、平和貿易ではなく、社会主義であらう。

もちろん、この事は、階級斗争の過熱した展開過程で、安保条約が廃棄される状態が、一時的に生みだされる事を排除するものではない。しかし、それは労働者にとつては、あくまでも経過的な状態にすぎないであらう。何故なら金融資本経済の基礎にふれたなく、金融資本家達の政策と斗争する事は出来ないからである。

重大な点は、カウツキー(今日の小ブル平和主義者と説く)が帝國主義の政策をその経済から切り離し、併合を金融資本の基礎のうえで可能であるかのような、他のブルジョアの政策と対置させているという点である。もしそうだとすれば、経済

における独占が、政治における非独占的、非強力的、非侵略的行動方法と両立出来ることになるであらう。……その結果は、資本主義の最近の段階のことも根本的な矛盾の根底を暴露するかわりに、それらの矛盾を塗りつぶし、鈍らす事になる。マルクス主義のかわりにブルジョア改良主義をもつて来る事にならうであらう。これらの言葉はなんと激しく、今日の小ブル平和主義者をむちうつているであろうか。しかし、彼等は「君達はいかにレーニンを引用するが、それはもう古くさい。今日では社会主義は世界的体制となり、労働者階級も大きく強くなつてゐる」と臆面もなく反撃する。だが帝國主義が変つたとしてもいふのだからか？ それとも法則的作用にちがつた方向を与え、その作用する範囲を制限しようともいふのだからか？ だが社会の法則そのものは人間であり、それが物と物の関係としてあらわれざるをえない事、社会法則そのものが廃棄されない限り、この盲目的に作用する「自然法則」から自由になりえないという事は、共産主義のABCに属する事である。

しかし、彼等は盛んに強弁する。

革命なくして中立なし(革命があつても中立はありえないのだが)という見解は、一見革命的であつても、実践的には日和見におちいる。実現出来る要求、民主的目標を解決し、この運動の発展の中でつきつきに核心に迫つて行くのだ。

たしかに、我々はプロレタリア革命の実現なくしては、民族独立がありえないと主張する。しかし、我々は民主主義的要求のために云々というのではない。我々は、これらの人々のように純粹の社会革命を待ちもたない。こういう人々は、きつと国民が投票場に整列して、「われわれは社会主義に賛成だ」といふだけで、社会革命だというのであらう。しかし、こんな純粹の社会革命を待ちもたない人は、いくら待つても決して革命にめぐりあえないであらう。そういう人こそが眞の革命を理解しない口先だけの革命家である。

安保改訂に反対するあらゆる色合いの人々を積極的に闘いに引き入れ、いろんな調子の斗争を統合し、革命的に定式化し、方向づけそれを燃えさせた事こそが、共産主義者の任務なのである。我々は正しい統一戦線戦術——先端的指導者内の結合ではなく、革命的指導下に来ていないが故に、それを信じてもない大衆を含めた共同の行動を可能にする戦術——に熟達せねばならない。

### 三、中立政策の破綻

#### ——若千の歴史的事実——

労働者政党をもつて任ずる社、共産党は、この闘いの中で最も狂信的な「中立論者」としてあらわれ、日々資本家階級に対する真剣な闘いを遂行している労働者階級の階級意識を麻痺させる役割を演じて、その裏切り性、小ブル性を遺憾なく発揮している。しかし、「この立場(「中立堅持」といふ立場)は、労働者と労働者組合の平和と独立のたたかひにおいて、だれが敵であるかという立場)は、労働者の思想的武器を解除させ、平和と独立の闘いの積極的な前進をおくらせる役割りにかわりつつある」(「アカハタ」

五八・七・八、日本労働者階級の前進のために)という僅か半年ばかりの言を翻し、中立の最も熱狂的な擁護者に変身した共産党こそは、労働者階級の指導者としての不可欠の、首尾一貫性を欠いたものとして、激しく弾劾されるをえないであらう。

彼等のこの転身は、その六ヶ月ばかりの間になされた陳毅中国外交部長声明とグロムニコの覚書によつてなされたものである。グロムニコは「日本の安全は再軍國化と戦争を拒否し、日本の中立を守る可能性を規定している日本憲法の諸事項を守ることによつて保障される」との覚書を送り、陳毅も「中国人民は日本人民の独立、平和、民主主義のためのたたかひを一貫して支持し、日本が平和な中立國家になることを心から期待する」と述べている。しかし、ここにみられるのは、やはり國と國との関係であり、國際主義の立場は消えている。彼等の議論はいつもこうである。「平和共存によつて全ての國が善隣関係をうちたて、それぞれの内政に干渉しないのが、今日のプロレタリア國際主義の内容をなすのである」と。しかし、ドイツの革命(一九一八—一九二三年)の敗北による世界革命の挫折と、ロシア革命の基礎の上に客觀的事実を絶対視する立場こそが、社会主義建設は國際的連帯と連続の基礎の上のみ実現せられるという深い透徹した洞察を、一國社会主義の理論によつておきかえてしまつたのだという事を、今日意識的な労働者は、彼等の裏切りの歴史の中から学びとつてゐるのである。(「共産主義」第一号「平和共存の起源」参照)もちろん、権力を獲得した時から、プロレタリアートは祖國防衛の立場に移行する。だが、それはその時から新しい内容を獲得するのである。孤立した労働者國家は自己目的的存在ではなく、革命の根拠地でなければならぬ。しかし、レーニン死後、包括的に政治権力を掌握した官僚層は、それを自己目的化し、特権を維持するために現状を維持することを目的とするようになった。彼等は、政治策略を通じて、ブルジョアと取引をし、各國の労働運動をブルジョアに圧力をかけさせるための外交政策の道具にかえてしまつたのである。しかし、そのような試みは常に破綻して来た。

彼等は、労働者大衆の革命家によつて失なわれかけた信望を、ロシアの労働組合の名によつてつなぎとめようとしたイギリス労働組合の改良主義幹部——パーセル一派を、イギリス労働者の「唯一の代表者」であると認めて、ゼネストを裏切つた彼等に支持を与えたり(一九二五—二六年)、中国では民族ブルジョアと取引する為、共産党員に、國民黨に加入し、その規律に無条件に服す事を要求し、上海での蔣介石の裏切りとクーデターに対する警戒心を怠つた。(一九二七年)

つづいて「社会ファシズム」の極左的政策を固執してドイツ革命を破滅させ(一九二九年—三三年)その結果ソ連は直接ヒトラーの脅威にさらされる事になると、スターリンはいままで政策を放棄して、ブルジョア自由主義者との共通の綱領を守る「人民戦線」を提唱する事になつた。英仏の指導者と友好を保ち、ヒトラーとのバランスを保つ為、フランス、スペインの革命運動は、ブルジョア民主主義の枠内に注意深く制限され、アラゴン、カタロニア等における工場、労働者管理、集団農場の結成等プロレタリア独裁への移行の試みは、共産党員ウリベ、ボザス等の政府突撃隊によつて解散せられた。ブルジョア自由主義の枠を踏みこえようとした革命的分子に対する迫害、投獄に、失望と幻滅を感じた労働者階級は、一都市、一都市とフランスに奪われるのを傍觀した。フランスでは人民戦線政府が自らその命を断つた。人民戦線の

明白な失敗をみて、ソヴェト共産党第十七回大会は「人民戦線政府は、いわゆる民主国家の役割を理想化して、その帝国主義的の性格を曖昧にした」という理由でそれを批判し、突如フランスとヒトラーとの同盟に移行し、その中立を要求した。だがヒトラーに対するこの恥づべき政策にもかかわらず、ドイツファシズムはソヴェトに対し侵略を開始した。明白な帝国主義戦争としての性格にもかかわらず、「民主戦線」の当然の帰結として、アメリカ、イギリス、フランスは、民主主義的なブルジョア階級として無条件的に美化された。その結果は、戦後の階級斗争における階級闘争主義を必然ならしめたのである。フランスにおいては産業復興斗争、日本における「解放軍」規定は、このような国際的背景をもつていたのである。

だが第二次大戦の過程から生みだされた世界的な階級斗争の進展は、中ソの協調的の同盟を破綻させた。最も強大なアメリカ帝国主義者に一切の勢力が動員せられる事になった。自国の安全を保障し、均衡を保つために、国際革命に依拠するのではなく、アメリカ帝国主義に敵対する一切の要素の結果を指す。それを拒否するチトーは中立主義として非難される。かくして、これらの対立の均衡の上に依拠しながら、自らの搾取する権利を大に拡大しようとしていたアラブの民族ブルジョア階級の安定化を目標としたエジプト、シリアの同邦化さえも、中立勢力の増大として美化されるに至った。しかし、これらの国にも、資本制生産の対立的性格に基づく矛盾が産出し、ナセルの中間主義が後退するようにならざるを得ない。ナセルとの対抗を余儀なくされるのである。このようなたまたま左右のシグザグは階級斗争に信頼をおかず、政治的策略によつて均衡を保とうとする必然の結果にすぎない。もちろん、敵に対する譲歩、或いは敵の隊列を分裂せしめるような部分的な要求を提するために必要とされる時がある。しかし、これらの策略、取引は、革命的斗争の基本的な方法に對し第二義的な性格のものでしかありえない。しかし、策略、取引が戦略的方法に発展した時、それは労働者によつて拒否されねばならない。

日本におけるプロレタリア革命の成功に一切の要素を従属させる方向を首尾一貫して、追求するのでなく、日本の資本家階級を中立化させ、それと妥協しようとする事は極東の安全を絶対に保証しないばかりか、それらの政策は絶対に破滅するであろう。その下で日本労働者階級と共に、中国人民が呻吟した帝国主義日本ではなかつたか。極東の安全、それは日本における労働者階級の勝利によつてのみ可能である。日本からのアメリカ支配駆逐のための斗争は、極東における社会主義実現のための革命的な大衆行動に從属されねばならぬ。

#### 四、 闘いをいかに発展させるか

今日安保改訂反対の斗争が小ブルの平和主義者の指導に委ねられているという事実は、いささかもその斗争の階級的意義を減ずるものではない。そればかりか、日和見主義、ブルジョア民族主義に對する闘いを早くから準備する事は決定的に重要だ。

安保改訂の陰謀がアメリカ帝国主義者の反革命体制強化の策謀を背景に、或程度それを利用して、自己の帝国主義的膨張政策を実現せんとする日本資本家階級の手によつて行なわれている事に注目せねばならない。日本資本家階級は、国内においては徹底的な合理化の強行によつて労働者に攻撃を加えながら搾取する権利を拡大するたぐに、過剰な資本を海外に輸出し、安保改訂によつて、それに新たな動力を加えようとしているのである。したがつてそのような資本家階級の陰謀に對抗するのは、階級斗争によつてのみ可能である。階級斗争をぬき去つた小ブルの平和主義による幅広い「国民運動」では勝利する事は出来ない。総評指導部は、全労と異つて、安保改訂反対の闘いを春斗の政治斗争を行うまで至つていないといつて闘いを独自に組織し、その意識はなかなか政治斗争を行つていないので難しい（総評太田議長）という。そういういながら、みずからの政治宣伝としては「民族主義的宣伝」を繰返して労働者を当惑させている。かくして闘いは、春斗の「賃金斗争」の谷間に行われ、国民大会への割当て動員である。警職法斗争を思いおこせ。政治的要求であろうと、労働者は、それぞれ自分達の階級の利益と合致しない事を知つたならば巨大な階級の闘いを行おうのだ。

安保改訂に對する闘いを更に発展させるためには、小ブル平和主義とともに、依然として根強い経済主義を払拭せねばならない。だがそのことは、資本家階級との真剣な斗争として闘われている経済斗争をよそに全く木に竹をついたような「中立論」による政治カンパニアの動員では決してなしえない。資本家階級の階級的意図を完全に暴露することなくして、日々闘つている労働者、その職場を支配する、同じ資本家階級こそが平和の敵であることを意識せしめることなくしてはだめである！ だが勇敢に、大胆に政治行動を！ それを中心とした広汎な小ブルの結束を！

帝国主義者の支配に對する反抗、一般的平和的気分の存在、第二次帝国主義戦争の経験から生れた侵略戦争の憎しみ、相斗う階級の共倒れをも結果しかねない核兵器による帝国主義者の支配強行に對する恐怖、これらさまざまな気分もおりまぎつて、その指導の決定的弱点にもかかわらず、安保改訂阻止の闘いが昂揚のきざしをみせている事は帝国主義者にとつて決定的障害である。共産主義者は正しい統一戦線戦術に熟達し、広汎な大衆を闘いにまきこみ、これらの闘いを一つの階級的な力に迄結束し、帝国主義者にとつては政治的決戦ともいふべきこの改訂をますます困難におとし入れる事が出来る。

しかも、日本資本家階級の侵略的帝国主義的意図を決定的に暴露する事は、警職法の失敗によつて満身創痍となつた岸政府にとつて、解決困難の課題となりつつあるのである。この安保改訂反対の闘いを、参議院選挙の道具とする議会議事主義によつてではなく、労働者階級を抑圧し、侵略戦争を企図する岸資本家政府打倒によつて闘え！選挙対策ではなく、大衆的斗争組織、戦斗指導部による地域共闘を進展させ、安保改訂反対の大衆的政治斗争による岸資本家政府の打倒を我々のまず第一歩の闘いとする事が出来る。安保改訂の大衆的抵抗の増大は、日本帝国主義の成長の要石に痛撃を与える事が出来る。安保改訂反対の闘いは、警職法反対斗争が一九五八年の闘いに示したよりも更に巨大な意義を日本の労働者階級のためにもたらすにちがいない。